

「障害者自立支援法」を考えるみんなのフォーラム

アピール

わたしたちは、今日ここ日比谷公会堂・野外音楽堂に、たくさんの市民のみなさんと共に、全国の障害当事者とその家族、関係者など6600人が集いました。

戦後、わずかずつ積み重ねてきたわが国の障害者福祉ですが、今般の障害者自立支援法案と一連の関連する動きは、これを大きく転換させるものです。気になるこの法案ですが、わたしたちの気持ちとはまだまだ距離感があります。なぜ、こんなにも早いテンポで進めなければならなかったのか、鳴り物入りで始まった支援費制度の総括はどうなっているのか、どの程度の基礎データの下で法案づくりが進められたのかなど、釈然としない点がたくさんあります。

今日のフォーラムでも、改めてわたしたちは考え合いました。2500万人におよぶ障害のある人と家族の置かれている本当の姿はどうなっているのか、わたしたち一人ひとりのニーズはどうすれば実現できるのか、そもそもわが国の障害者施策の水準は妥当なのだろうか、ということ。

残念ながら、肯定的な答えは見出し得ません。国際障害者年にちなんでの国連決議の一節に、「一部の構成員をしめ出す社会は弱くて脆い社会である」と記されています。この国を真にたくましく、希望と信頼の持てる国としていくためにも、もっとわたしたちのことを考えてほしいと思います。

わたしたちは、死活問題と言ってもよいこの障害者自立支援法案の国会審議の行方を、まさに固唾を呑んで見守りたい、そんな心境です。同時に、審議を通してわたしたちのニーズと実態を、社会全体にもっと知ってほしいのです。また、尾辻厚生労働大臣だけではなく、小泉総理大臣や谷垣財務大臣などにも、そして国会を挙げてわたしたちのことに真剣に向きあってほしいのです。

「居ても立ってもいられない」、そんな気持ちで集ったわたしたちです。一人ひとりの願いや思いを次の5項目に凝縮しました。市民のみなさん、国会や政府関係者のみなさん、マスコミ関係者のみなさん、耳を傾けていただくよう、心から訴えます。

1．障害保健福祉関連の予算を大幅に増額してください。これまでの「見積もり」は、誤っていたように思います。財政難にあっても、必要で十分な予算額を確保してください。

2．応益負担の導入は余りに乱暴です。とりわけ本人が負担できない場合に家族に負担が及びますが、これは障害者にとって心苦しく大きな屈辱です。また、働きに行った場で費用負担が生じるのは納得できません。

3．現在の法案では、難病や発達障害など、いわゆる「谷間の障害」と言われている人々は対象から外されています。分け隔てのない法律としていかなければなりません。

4．働く場をもっと増やしてください。そのためには、雇用と福祉の一体的な体制が図られなければなりません。雇用や仕事の発注面で、企業も応援してください。

5．自分の人生や生活は自分で決めたいのです。個々のサービスの決定にあたっては、障害当事者の自己決定を尊重してください。市町村は、勝手に決めないでください。

2005年5月12日